

文化昆虫ホタル～古典の中から～

遊磨正秀（滋賀県大津市）・後藤好正（神奈川県横浜市）

1. はじめに

ホタルは、その光の美しさのため、古くから書に記され、詩歌に詠まれ、絵図や写真の題材となってきた。その量は、これらの題材に扱われる生物としては、数ある動植物の中でも群を抜いているであろう。それらの記述は、かつてのホタルの生息状況や生息環境、ならびに当時の人々のホタルに対する感覚などを示す貴重な資料である。このような文化の対象として扱われるホタルは「象徴的環境財」あるいは「文化昆虫」といえる（嘉田、1992；遊磨、1993）。

文学、詩歌等にあらわれるホタルに関する記述については、神田（1935）や南（1961）にかなりまとめられている。ここでは主に明治以前の資料について、若干の資料を追加し、時代背景の流れを読み取りやすいように、年代順に並べて整理しなおした（表1）。これをもとに、ホタルに関することがらの時代変遷に触れてみたい。

2. 江戸時代以前のホタル

ホタルは、古くは「日本書紀」（奈良時代、8世紀）から登場する（表1）。そこでは、邪気を払う正義の光り輝くものという表現のように読みとれる。ただし、正義感の象徴のように扱われるのはこれが最初で最後のようである。

平安・鎌倉時代（8～13世紀）には、中国文化の導入に伴い、車胤の故事や「腐草為螢」という発生説などホタルに関する事柄が日本へ伝えられた。このことは上流階級の人々にはよく知られており、これらをふまえた和歌や物語文学が見られるようになる。その一方、和歌では、螢の光を愛でて歌詠みの素材としてとりあげ、ときに恋いこがれるものや魂のたとえとして情緒豊かに扱われている。また、捕らえて持ち帰り、部屋に放ったりして男女を問わず楽しむ対象でもあった（大和物語、

宇津保物語、源氏物語など）。このことは、京の町中においても、夜に出歩ける程度の近さの所にホタルがいたことを示しており、この頃からホタルは身近な存在であったことがうかがわれる。

しかしこの時代、「・・其螢の数は知らね共・・」（鳥羽院の北面の會、1129頃）や「螢のおほくすだきける」（今物語、1239？）のように、多くホタルが飛んでいたことを示す記述もあるものの、多くの記述が、ホタルが乱舞する様そのものをめでていない点に注目すべきであろう。これは、ホタルが多いといっても、目を見張るほどの乱舞がみられない状態であった、つまり、さほど数が多くはなかったことを示すものかもしれない。あるいは、これら記述を残しているのは上流階級の人々であり、華やかさにぎやかさ、あるいは遊興のをおもしろく表現するよりも、「蛍たかく飛びあがる」（伊勢物語、840頃）、「みつよつつれてとびあがり」（宇津保物語、980頃）や「ただ一二などほのかにうちひかりてよくも、いとおかし」（枕草子、1000頃など、人の心を控えめに表現するための題材に用いていたからかもしれない。

3. 江戸時代のホタル

ホタルに関する記述は、15～16世紀の頃、しばらく乏しくなるが、18～19世紀（江戸時代中・後期）になると、各地の名所図絵などの中にホタルの多い場所が記されたり、螢狩りの様子が示され（和漢三才図會－滋賀県石山、千曲之真砂－長野県上田、阿波名所図絵－徳島県母川など）、それらの場所が以後、いわば観光名所化していくことになる。これは、これらの作品に庶民の情報が加えられて、ホタルの多い場所が記述されるようになったのか、そもそもホタルの多い場所が増えたのか、定かではない。もちろん、人々が行楽や旅行を楽しめるような時代となって、他より勝る

もの、派手なものを良しとして、それをむしろ宣伝するようになった時勢という事情も加わる。なお、石山のホタルについては14世紀の四季物語にすでにその記述が見られる。

ちなみに、18世紀末に編纂された骨董集（刊行は19世紀初頭）によれば、江戸・浅草では17世紀末には船着場近くにホタルが飛んでいたが、18世紀末になるとそこには家々が建ちならびかつての面影はないことが示されている。これはいわば土地開発による自然の退行現象の記述の走りに当たる。が一方で、身近な自然が乏しくなったことで、人々の足を各地の観光名所へ向かわせることになったことを示唆している。

4. 明治以降のホタル

近代に入ると、さまざまな記述を文字として残すことがかなり自由に行えるようになり、ホタルにかかわる記述もここでは扱いきれないほどに飛躍的に多くなる。

一方、ホタル見物の熱やホタル名所の観光地化は近代に入っていっそう進み、籠に入れられたホタルが町角で売られたり、1920年頃には滋賀県守山へ国鉄が大阪からのホタル見

物の臨時列車を編成するにまでなる。ところが1940年頃から各地でホタルの減少が目立つようになり、1980年頃からホタルには、町づくりや水辺環境の再生の象徴として、日本人の生活風景の中で、いっそう象徴的な価値を与えられるようになったことは確かである。

ここに示したのは、ホタルにかかわる世情の日本全体の流れである。ホタルに関しては、神田（1935）、南（1961）に一部が記述されているように、各地それぞれに特徴のある唄なども多い。水辺環境の保全や生物多様性保全の観点に加え、後藤（1998）が指摘するように、地域文化の多様性としてのホタル文化について詳しく検討すべきであろう。

文 献

- 嘉田由紀子 1992, ホタルの風景論. 環境イメージ論(古川彰・大西行雄編), pp. 35-79.
 遊磨正秀 1993, ホタルの水、人の水. 新評論.
 神田左京 1935, ホタル. 日本発光生物協会.
 南喜市郎 1961, ホタルの研究. 太田書店.
 後藤好正 1998, ホタルの文化系シンポジウムを. ホタル情報交換誌, (21): 4-5.

表 1. 古典にみるホタルにまつわる記述。ただし、多くのものは原文にあたっていない。ワープロにない漢字は [] で囲んで示している。

出典：ホタル(神田左京, 1935)；古事類苑(1970, 吉川弘文館)；
 古典文学動物誌(1995, 學燈社)；群書索引(1916, 1975復刻, 名著普及会)

年代	時代	出典・内容
BC300?	殷～ 春秋	詩經 幽國篇の東山に、ゆうようたる宵行(功[火習]燿宵行、ゆうよう=さかんな光、宵行=夜歩く、つまり光って夜歩く虫)という句がある。
BC249- 237	秦代	呂氏春秋(相國呂不韋) 腐草化為[虫干](腐った草が化けてホタルになる)
BC206- AC24	前漢	禮記月令 腐草為螢<腐った草がホタルになる>
265-420 720	晋 奈良	車胤「螢雪の功」の故事 日本書記 卷第二(神代下) by 舍人親王ほか編 ・・・葦原中国(アシハラノカヅクニ)の主(キミ)とせむと欲(ホト)す。然(シカ)も彼(カ)の地(チ)に、多(オホ)に螢火(ホタル)の光(アカ)く神(カミ)、及(オ)び蠅声(オバ)カす邪(ア)しき神有(アリ)。・・・「吾(ワレ)、葦原中国の邪(オノ)しき鬼(モノ)を撥(ハラ)い平(ヘ)けしむと欲(ホト)ふ。・・・
770s	奈良	万葉集 防人の妻の歌の中に、「螢なす ほのかに聞きて・・・」
?	平安?	舊事紀(旧事本紀) 道速振、荒振の神達が豊葦原の中つ国(日本)を夜あるくと、ホタルがたくさん集まり飛んで光っていた
780s?	平安	? 樹間よりみゆるは谷の螢かもいざりに螢の海へゆくかも 喜撰法師

(続き)

年代	時代	出典・内容
840s	平安	伊勢物語(上) 昔、男ありけり。人のむすめのかしづく。いかでこの男に物いはむと思ひけり。(中略)時はみな月のつごもり、いと暑きころほひに、よひは遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。螢たかく飛びあがる。この男ゆく螢雲のうへまでいぬべくは 秋風ふくと雁につげこせ <ヘイケボタルをよんだものか・・神田左京(1935)>
840s	平安	伊勢物語(下) はるる夜の星かかはべのほたるかも わがすむ方のあまのたく火か
905	平安	古今和歌集 by 紀貫之・紀友則ほか撰 夕されば螢よりけに燃ゆれども 光見ねばや人のつれなき
918	平安	本草和名 by 深江輔仁 螢火、和名保多留
956	平安	大和物語(上) 桂の見こに、式部卿の官すみ給ける時、その官にさぶらいけるうなるなん、このおとこ官をいとめでたしと思ひかけ奉りけるをも、えしじ給はざりけり、ほたるのとびありきけるを、かれとらへて、此わらはにのたまはせりければ、かさみの袖にほたるをとらへて、つつみて御覽せさすとて、聞えさせける。(以下略)
980s	平安	宇津保物語(初秋) 螢おはします御前わたりに、みつよつつれてとびあがりく、これがひかりに、ものは見えぬべかめりとおぼして、たちはしりて、みなとらへて御そでにつつみて御らんずるに、あまたあらんは、よかりぬべければ、やがてわらはさぶらふ、螢すこしもとめよやかなふみ思い出んと仰らる、腰上わらは、夜ふけぬれば、さぶらはぬうちにも、なかただの朝臣、承りたつ様ありて、水のほとり、草のわたりにありき、多くの螢をとらへて、朝服のそでにつつみてもて参りて、くらき所にたちて、この螢をつつみながら、うそぶく時に、上いとしく御らんじつけて、なほしの御袖にうつしとりて、つつみかくしてもてまゐり給ひて、内侍のかみのさぶらひ給ふ、几帳のかたびらをうちかけ給ふに、かの内侍のかみの、ほどちかきに、この螢をさしよせて、つつみながら、うそぶき給へば、さるうすもの御なほしにぞ、ただつつまれたれば、残る所なくみゆる、
986	平安	権大納言行成 漁火のうかべる影と見えつるは波のよる知る螢なりけり
985頃	平安	曾根好忠 夕やみに海士の漁火見えつるはまがきが島の螢なりけり
1000s	平安	枕草子 by 清少納言 夏はよる月のころはさらなり、やみもなほほたるおほくとびちがひたる、又ただ一二などほのかにうちひかりてよくも、いとおかし、
1010?	平安	源氏物語(25) by 紫式部 み木丁のかたびらを、ひとへうちかけ給に、あはせて、ざとひかるもの、しそくをさし出たるかとあきれたり、ほたるをうすきかたに、此夕つかたいとおほくつつみをきて、ひかりをつつみかくし給へりけるを、さりげなくとかくひきつろふやうにて、ひはかにかくけちえんにひかれるに、あさましくて、あふぎをさしかくしたまへる、かたはらめいとおかしげなり、おどろおどろしきひかり見えは、官ものぞき給ひなん、(中略)御心ときめさせられ給ひて、えならぬうすもののかたびらのひまより、みいれたまへるに、ひとまばかりへだてたるみわたしに、かくおぼえなきひかりの打ほのめくを、おかしとみ給ふ、程もなくまぎらはしてかくしつ、されどほのかなるひかり、えんなることのつまにもしつねく見ゆ、ほのかなれど、そびやかにふし給へりつるやうだいのおかしかりつるを、あかずおぼして、げにあのごと御心にしみにけり、なく聲も聞えぬ虫の思ひだに人のけつにはきゆる物かは、思ひしり給ぬやと聞え給ふ。(以下略)
1000s	平安	源氏物語(少女巻) by 紫式部 窓の螢を陸び、枝の雪を馴らしらまふ志の・・
1012	平安	和漢朗詠集 by 藤原公任 撰 兼葭水暗うして螢夜を知る 揚柳風高うして雁北を送る 許渾
1086	平安	後拾遺集 by 藤原通俊 撰 ほたるをよみ侍りける 源重之

(続き)

年代	時代	出典・内容
		をともせで思ひにもゆる螢こそ 鳴虫よりも哀なりけれ 宇治前太政大臣卅講ののち歌合し侍けるに、ほたるをよめる、 藤原良經朝臣
		澤水に空なる星のうつるかど みゆるはよはの螢なりけり
1129頃	平安	鳥羽院の北面の會 いざや其螢の数は知らね共玉江の芦の見えぬ葉ぞなし <勢多、石山、宇治のゲンジボタルをうたったもの?>
1169	平安	梁塵秘抄 常に消えせぬ雪の島 螢こそ消えせぬ火はともせ・・
1162- 1241	鎌倉?	続後拾遺集3 おしてるや難波堀江にしく玉の よるの光は螢なりけり 中納言定家
1190	鎌倉	捨玉集 終夜われこそは見え飛ぶ螢 宇治の川のまつ梢を 作者不明
1190	鎌倉	捨玉集 大井川星こそ波にうかひぬれ 螢とびかう夕闇のそら 作者不明
1200	鎌倉	? 秋風とかりにやつぐる夕ぐれの 雲近きまで行く螢哉 <へイケボタルをよんだものか・・神田左京(1935)> 式子内親王
1200s	鎌倉	宇治拾遺物語 (12) いまはむかし、あづまうどのうたいみじうこのみよみけるが、ほたるを見て、 あなてりやむしのしや尻に火のつきて 此人玉ともみえわたるぞ、 あづま人のやうによまんとて、實はつらゆきがよみたりけるとぞ、
1216	鎌倉	新古今和歌集 by 藤原定家ほか撰 はるゝ夜の星か河邊の螢かもわが住む方の螢のたく火か 在原業平朝臣
1180- 1235	鎌倉	明月記 by 藤原定家 嘉祿二年四月七日辛卯、招請承明門黃門令衆灌佛、布施三エタスキ薄物小 単文裏白張薄物、以胡粉キコエ虫ノ思ダニト令書、以几帳手横竿以黒紐 結付之、其中入螢也、
1239?	鎌倉	今物語 by 藤原信実 編著 ある殿上人、ふるき宮ばらへ、夜ふくる程に参りて、北のたいのめむだう にたたずみけるに、局におるる人の気色あまたしければ、ひきかかれての ぞきけるに、御局のやり水に、螢のおほくすだきけるを見て、さきにたち たる女房の、螢火みだれとびてと、うちながめたるに、つぎなる人、夕殿 に螢とんでとくちずさむ、しりにたちたる人、かくれぬものは夏むしの、 とはなやかにひとりごちたり、とりどりにやさしくおもしろくて、此男何 となくふしなからんもほいなくて、ねずなきをしいでたりける、さきなる 女房もおそろしや、螢にも聲のありけるよととて、つやつやさわぎたる けしきなく、うちしづまりたりける、あまりに色ふかかなしくおぼえけ るに、今ひとり、なく虫よりも、とこそとりなしたりけり、是もおもひ入 たるほどおくゆかしくて、すべてとりどりにやさしかりける、 音もせでみさほにもゆる螢こそ鳴虫よりも哀成けれ 螢火亂飛秋已近、辰星早没夜初長、夕殿螢飛思悄然 つつめどもかくれぬ物は夏むしの 身よりあまれる思い成けり
1246	鎌倉	? 秋ちかし雲居までとや行螢 澤邊のみづにかげのらん亂るる 皇大臣官大夫後成女 <へイケボタルをよんだものか・・神田左京(1935)>
1251	鎌倉	? 徒らに野澤に見ゆる螢かな窓にあつむるひとやなからむ 後嵯峨院 <へイケボタルをよんだものか・・神田左京(1935)>
1252	鎌倉	十訓抄(1, 11) (道に関する記述)
1254	鎌倉	古今著聞集(5) by 橘成季 和泉式部おとこのかれがれに成ける比、貴布襦に詣でたるに、ほたるのと ぶを見て、 ものおもへば澤のほたるも我身より あくがれいづる玉かとぞみる とよめりければ、(以下略)
1278	鎌倉	続拾遺集 小笹原しのにみだれてとぶ螢今いく夜とか秋を待つらむ 土御門院 <へイケボタルをよんだものか・・神田左京(1935)>

(続き)

年代	時代	出典・内容
1360s?	南北朝	四季物語(5) by 鴨長明? 石山に詣でぬ、かへさには、螢いくそばく、薄衣の器に包み入れて、宮の内に奉れば、ここの御簾、或は御局のそこらに、数多放されて、晴るる夜の星ともせしも、いひあらず思ひたどりぬ、されどこの蟲も夜こそあれ、晝は色異様に夜の光にはけおされて、劣れる蟲也、まいて手に觸れ身に添へては、悪しき香りうつり来ぬ、手には蘭を握り、身には百壽の香を塗る、若人君の前にては、心あるべき蟲の香ならし、
1381	南北朝	新葉 春日野や霜に朽ちにし冬草の またもえ出でて飛ぶほたるかな 春宮大夫師兼
1382	南北朝	続後拾遺集 秋ちかきさわべの草の夕露に光かはすはほたるなりけり 内大臣 <へイケボタルをよんだものか・・神田左京(1935)>
1518	室町	閑吟集 わが恋は 水に燃えたつ螢々 もの言はで笑止の螢
1532	室町	塵添[土蓋]養鈔(1,8) (螢を集めることについての記述)(腐草、螢となるという記述)
1644-94	江戸	おのが火を木々の螢や花の宿 芭蕉
1701	江戸	桃源遺事(西山遺事) by 安積寛等 (前略)又宇治川より螢を御取寄、後楽園の池へ御放候、其後年々彼所に 出候螢は大きく光強く候、(以下略)
1709	江戸	大和本草 by 貝原益軒 螢火、ホハ火なり、タルハ垂也、下體光ル故名トス、大小二種アリ、山中ノ川ノ邊ニ多シ、勢田宇治ニハ螢火多クシテ賣之、賣螢火事、和漢メヅラシ、(中略)詩經ニコト[火習]燿タル宵行トイヘリ、宵行ハ即螢也、
1713	江戸	和漢三才圖會 by 寺島良安 『本草綱目』(虫部、化生類、螢火)に次のようにいう。螢には3種ある。小さくて宵に飛び腹の下に光明のあるものは、茅根の化したものである。呂氏(『呂氏春秋』)の「月令(ガツリョウ)」に、「腐草が化して螢となる」とあるのがこれである。 長さが蛆・[虫蜀](ケムシ)ぐらいで、尾の後に光があり、翼はなく飛ばないもの、これは竹根の化したものである。明堂の「月令」に、「腐草が化して[益蜀](ケン)となる」とあるのがこれである。 水螢は水中にいる。みな濕熱の氣に感応して遂に変化して形を成したものである。(中略) 思うに、螢(和名は保太流)は大抵大きさ3、4分。黒色で両の頬に赤点があり、臭気がある。尻の銀色の処が夜に光を出す。紙につんでも光は外にとおる。麦わらを用いて揉み砕くと銀砂のようである。江州の石山寺の溪谷(試みの谷という)は螢が多くて長さも普通のものの倍はあり、そこを螢谷と呼んでいる。北は勢多の橋まで2町ばかり、南は供江瀬(供御瀬(クゴノセ))まで25町、その間に高さ10丈ばかりのところを火焰のように群がり飛ぶ。あるいは数百と塊りをなし、いつも芒種(ボウシュ、陰曆6月5日頃)の後5日から夏至の後5日まで、およそ15日が盛んである。風雨なくしかもそれほど快晴でない夜はいよいよ多い。ただし、北は橋を限度とし、東は川を限度とし、これをこえるといない。また時節をすぎると全く姿を見せなくなる。その螢は下って山州(ヤマシロ)宇治川に至って約3里ばかり、ここでは夏至から小暑(陰曆7月7日頃)の間が盛んである。けれども石山の盛んなのには及ばない。これも西は宇治橋を限りとし、そこよりは下らない。ともに一つの不思議である。茅根・腐草の化するところに多くいるのは普通のことであるが、この地は徳に茅草が多いというのではない。俗に源頼政の亡魂であるとするのは笑止な説である。この時節になると螢見物の遊興の人々の群があつまって、天下に名を知られている。
1717	江戸	東雅(20) by 新井白石 螢 ホタル 葦原中國に道速振荒振神等多有て、夜者若蠟蜜火而喧響という事、舊事紀にみえたれば、此物の名上世にすでに聞えたる也、ホタルとは、たとへば爾雅に螢火即[火石]とみえたるが如く、ホは火也、タルは[火石](テル)也、テルといひ、タルといふは、轉語なる也、萬葉集抄に、ホ

(続き)

年代	時代	出典・内容
1814-5	江戸	骨董集(上編上) by 岩瀬醒 江戸雀[延寶5年印刷]十之卷浅草駒形堂の條に云、(中略)船つきにして、出船入船のありさまは、遠浦のかえる歸帆とや申さん、九夏三伏のあつき此は、風すずやかに吹おとし、いびかふ螢水にうつり、勝景かぎりなき所なりとあり、繪を見るに堂のかたはらに、樹木ある體をかけり、又江戸名所記[寛文2年板]の駒形堂の圖を見るに、木立蔭などありて、螢もをるべき體也、 焦尾琴[元禄14年板] こまがたに舟よせて、此碑では江を哀まぬ螢哉 其角 かくいへるも、眼前の體なるべし、今は所せまきまで人家立つづきて、螢に化すべき草だになし、(以下略)
1818	江戸	螢火や呼ばらね龜は膳先へ 不忍池 一茶
?	江戸	きれ草鞋螢とならば隅田川 一茶
1830s	江戸	嬉遊笑覽 by 喜多村信節 螢合戦は、狂歌咄に、卯月の末つかた、ここ[宇治]は螢の集りえならぬ興を催せり、餘所の螢よりは、一きは大にして、光りことさらにみゆ、世にいふ頼政入道が亡魂にて、今も軍する有さまとて、夜に入ぬれば、數十萬のほたる川面にむらがり、或は鞠の大きさ、或はそれよりも猶大に丸がりて、空にまひあがり、とばかり有て水のうへにはたと落て、はらはらとつけてながれ行こと、幾むらとも限りなし、正章千句に、さて網をもちかよふ夏川、螢こよという聲、波に響きわたり、續山井に、火廻しがせたから宇治に行ほたる、和漢三才圖會に、石山の溪に螢多して、常のよりは大なり、此所を螢谷と呼、北は勢多の橋、南は供江ヶ瀬に至る、其あはいを群がり飛こと、高さ十丈ばかり、火焰のごとし、又數百集りて塊ることあり、大かた芒種の後、五日より夏至の後、五日までの間、十五日ばかりを盛りの時とす、其後下りて宇治川に到る、ここには夏至小暑の間をさかりとす、また一説に云、小満の後、四日五日の間、宇治勢多西賀茂北宇喜多社、及水上村に螢多くあり、一時の壯觀なりといへり、東國には、下野佐野を名所とす、
1834-1836	江戸	江戸名所圖會 <落合螢の繪>此地は螢に名あり、形大にして光りも他に勝れたり、山城の宇治、近江の瀬田にも越て、玉の如く又星の如く亂れ飛で、光景最奇とす、夏月夕涼多し
1834	江戸	信濃奇勝録 by 井出道貞 (螢合戦についての記述)
1842	江戸	候鯖一擧 by 龜田鵬斎 (螢籠についての記述)
1850	江戸	想山著聞奇集 by 三好想山 (螢の怪についての記述)
1856	江戸	蟲譜図説(8) by 飯室庄左衛門 集解、時珍説螢有三種ト言モノハ、頭及甲黒ク、背赤キ小蟲ナリ、今オシナベテ「ホタル」ト呼者ナリ、「ムシホタル」ハ蜀ノ類ナリ、「ウジホタル」ハ、土ニ生ル蠶ノ類ニシテ、物各異リ、
1889	明治	言海 by 大槻文彦 ホタルは、火垂轉、或云、火照轉
1900	明治	名どころの螢大きな光かな 子規
?	明治	各の紙袋持つ螢狩 子規
1931	昭和	日向郷土志資 方言雜考「ホタル、(螢)のタルも亦、太郎の名の中に包括してよいかと考える。蓋し又ホタルと稱する地方は甚だ多かつた、且つそのホが若し神慮の顯はれで、目につくものを稱した、古語のホと語源を同じうするならば、ホタルの命名の動機は、略々これを想像しうるのである。即ちあの不思議な光を放つ虫が、丁度田植の頃に出て遊行する。その神性の事實から命名されたと考えられる。實をいへばタローの國語が、タルの古語と何ら関係あるか私にはまだ明かでないが、タロの古い語感には、神性乃至は畏怖の情のひそんでいたらしいことを私は想像している。・・・虫名のタロー亦それと同じ感情によって名付けられたと自分は想像しているのである・・・。